

川崎のヤングケアラー支援制度を考える
～気づこう、つながろう、支えよう

こどもの居場所の可能性と課題

川崎市ふれあい館 鈴木健

川崎市ふれあい館 1988年オープン



かつての居場所では、
子どもが子どもを連れ
れてきて、みんなで
面倒をみていた。

ヤングケアラー
かあ……。。

ヤングケアラーという言葉に
よって救われた。

人休

水子



Natsu yasumi yada
datte yasumi jyan
okasan tetsu dai dake
dayo

Doko ni mo ika naishi

Ie ni iru dake dashi

ヤングケアラアの育ちの中で

- 小学生　なにが普通かわからない。
- 中学生（思春期）
 - ・友だちの家庭などとの違いに気づいてくる。
 - ・もう、こんな家いやだ！
 - ・あきらめ感の固定化、力を失っていく。
 - ・家や学校でうまくいかなくなっていく。
- 高校生
 - ・家族との確執が深まる。
 - ・中には、家族への恨みが強く固定化してしまう場合も。
 - あとは、親を殺して、家を出ていくだけ。わたしは、家族に何も期待しないし、何も求めません。

居場所を求めるには
わけがある。

学校にも家にも居場所がない
こどもたち（コロナ禍でようやく
認知されるようになった）

こどもの居場所の可能性

●居場所の力

- ・安心できる居場所ができると、ありのままの姿を表現できるようになる。
- ・様々なこどもたちとの出会いから語り合いへ

●当たり前をとりもどせ！

ーこどもの権利保障

●こどもが変われば親も変わる。

こどもの居場所の課題

- 出会うことの難しさ
 - だからこそその連携
 - 連携を具体的な形で！
- こどもが居場所に来れるようになるためには、家族支援が必要。
 - でも、家族を支えるサポートシステムがあまりない。
- あの親はなにやってるのよ！
 - 社会のまなざしはあたたかくない。

川崎でヤングケアラー
を支える取り組みがす
すんでいく！